

病 因 と 病 態 < C 4 >

オーガナイザー

病理学講座 教授 村 垣 泰 光

教 員 名

病理学講座

教授 村 垣 泰 光

講 師 及 川 恒 輔・佐 藤 冬 樹・中 西 雅 子

非常勤講師 阪 本 晴 彦

非常勤講師 尾 崎 敬

非常勤講師 伊 倉 義 弘

I 一般学習目標

疾患の正しい診断と治療のために、疾患の成因 (Etiology) ・発生機序 (Pathogenesis) を理解し、これに基づいて個体に現れる変化から病態生理 (機能の異常) と病変 (形態の異常) の関連を知り、病気について正しい診断を下す基礎的病理学的観察法、および診断方法を身につける。

II 個別学習目標

1. 病理学を学ぶ意義について述べることができる。
2. 形態学的な変化を表現する言葉としての病理学的用語を定義に従って用いることができる。
3. 各種疾病の成り立ち・病因について、形態学的変化と関連づけて述べることができる。
4. 疾病の場としての人体各臓器の基本構造とその特徴を、疾患と関連付けて説明できる。
5. 疾患の特色より症状、症候との関連が説明できる。
6. 病気の診断に至る過程を組み立てることができる。
7. 病気の自然経過と治療による修飾が判別できる。
8. 病理総論的、臓器横断的な疾患の分類法について説明できる。
9. それぞれの臓器における代表的疾患を挙げるができる。
10. 疾患の病理学的特色とその成り立ちを説明できる。
11. 各論的疾患分類について説明できる。
12. 臨床医学における病理診断の役割と位置付けを説明できる。
13. 病理診断業務の仕事の流れを説明できる。
14. 病理学における解析法、検索法について列挙できる。
15. 迅速診断、永久標本による診断、特殊染色、電顕、免疫組織化学等の病理学的検索方法の違いと特徴を説明できる。
16. 病理解剖における注意点と実際の方法を説明できる。
17. 固定法の種類とその原理、実際の使用法、使用上の注意点について説明できる。
18. 顕微鏡を使用して、組織標本の観察ができる。
19. 組織標本を病因と対比し、病変の成り立ちを説明できる。
20. 代表的な分子病理学的方法について説明できる。
21. 病理学分野の学術図書より学術情報を得、その知識を整理することができる。
22. 病変の組織細胞学的特色について述べるができる。
23. 細胞の形態学的変化、特色とその機能の変化について述べることができる。

III 教育内容

V期：病理学総論講義

	担当者		担当者
1. 細胞の傷害と細胞の死	及川	1. 病理学序論	村垣
2. 炎症、アレルギー性疾患	中西	2. 変性・退行性病変	及川
3. 自己免疫疾患	中西	3. 非腫瘍性増殖性・修復性病変	中西
4. 感染症	尾崎	4. 腫瘍	中西
5. 循環障害	阪本	5. 先天性疾患	中西
6. 老化	及川	6. 機能（内分泌／代謝）異常	中西

V期：病理学各論講義

	担当者		担当者
1. 循環器疾患	村垣	1. 呼吸器疾患	佐藤
2. 神経・筋肉疾患	村垣	2. 泌尿器疾患	佐藤
3. 造血器疾患	尾崎	3. 女性生殖器疾患	村垣
4. 消化管疾患	村垣	4. 乳腺疾患	佐藤
5. 肝胆膵疾患	伊倉	5. 男性生殖器疾患	佐藤
6. 口腔・唾液腺疾患	佐藤	6. 内分泌疾患	村垣
		7. 骨・軟部・皮膚疾患	村垣

V期：病理学総論実習

担当者：村垣・佐藤・及川・中西

1. 細胞の傷害と細胞の死	1. 変性・退行性病変
2. 炎症性疾患	2. 増殖性/腫瘍性疾患
3. 循環障害	3. 機能（内分泌/代謝）異常

V期：病理学各論実習（各論の授業内容に合わせる）

担当者：村垣・佐藤・及川・中西

1. 循環器疾患	1. 呼吸器疾患
2. 神経・筋肉疾患	2. 泌尿器疾患
3. 造血器疾患	3. 女性生殖器疾患
4. 消化管疾患	4. 乳腺疾患
5. 肝胆膵疾患	5. 男性生殖器疾患
6. 口腔・唾液腺疾患	6. 内分泌疾患
	7. 骨・軟部・皮膚疾患

IV 学習および教育方法

講義：基本的知識について、板書、スライド、プリントなどを併用して行う。必要に応じてレポートを課す。

組織実習：各人が、光学顕微鏡あるいはバーチャルスライドを用いて、病変の組織像の観察やスケッチを行う。実習後にスケッチを提出する。バーチャルスライドの使用に際しては、各自のパソコンを使用することも可能である。

V 評価の方法

講義及び実習への出席、レポート、実習、定期試験の点数等により行う。

講義は3分の2以上、実習は80%以上出席した者のみ評価の対象とする。

1. 定期試験
筆記試験または口頭試問
2. 実習試験
病理組織学的所見および診断に関する試験

3. 合否の判定

定期試験90%、実習試験10%で評価し、60点以上を合格とする。

定期試験（総論および各論）の成績は全学的な基準により評価して判定する。

4. 再試験は1回だけ実施するが、その合否発表は行わない。

VI 推薦する参考書

- | | | |
|-----------------------------|-------------------------------------|--------------------------|
| ○ Cotran, Kumar and Collins | Robbins Pathologic Basis of Disease | W. B. Saunders Company |
| ○ Rubin and Farber | Pathology | J.B. Lippincott Company |
| ○ Alberts et al. | Molecular Biology of The Cell | Garland Publishing, Inc. |
| ○ 相沢・菊地, 菊地・吉木編 | 新病理学総論、各論 | 南山堂 |
| ○ 飯島宗一監修 | 組織病理アトラス | 文光堂 |
| ○ 秦順一・坂本穆彦編集 | 標準病理学 | 医学書院 |
| ○ 北村幸彦 編 | 新病理学入門 | 南山堂 |
| ○ 清水道生 編 | 集中講義病理学 | メジカルビュー |
| ○ 笹野公伸 他 編 | Newエッセンシャル病理学 | 医歯薬出版 |
| ○ Klatt EC著 鷹橋浩幸 監訳 | ロビンス&コトラン病理学アトラス | エルゼビア・ジャパン |